

## 執筆を振り返って

兼任編集室員 榊 達雄

途中から執筆に加わることになり、第三編第四章第二、三節の一九七〇年代の「名古屋大学改革に向けて（一）（二）」を分担することになった。内容は大学紛争後の大学改革ということであった。しかし、大学紛争時には、いわゆる大学封鎖等も起きたが、大学改革案が提案され、実際に大学改革も行われている。このときの大学改革は、紛争後の大学改革と深い関係がある。そこで、大学紛争は別の方が執筆されるので、多少重複するところがあってもやむをえないが、極力大学紛争後の大学改革に限るようにこころがけた。

第二節の「大学管理運営の改革」については、刊行されている資料集に基づいて全国的動向を踏まえた上で、本学の場合の叙述をしたが、この時期の「評議会議事録」「学部長会議事録」が相当詳しく会議で議論されたことを記録していたので、執筆に際して非常に助かった。学長選考過程への職員・院生・学生参加については、全国的な動向を背景にして、本学でも実現することになるが、その間の経緯は両議事録を見ていると、大げさにいえば手に取るように分かり、思わず検索を忘れて読み入ったことを覚えている。

「教養部改革の進展」については、全学的な問題として、両議事録がかなり詳しく扱っていたので、両議事録と一九八九年三月の『教養部改革調査報告書』を利用させてもらった。教養部改革については、一九七〇年代当初から、カリキュラム改革が実施され、四年間を通じて専門教育と一般教育を実施する四年一貫教育や教養部制度廃止の提案が行われ、その後も四年一貫教育、カリキュラム改革の検討がなされるとともに、教養部制度改革が構想さ

れ、部分的には実施されてきたこと、他方で名大職組等も四年一貫教育問題等の研究会を開催して検討していることを考え合わせると、最近の教養部改革、人間情報学研究科・情報文化化学部の創設の背景には、こうした全学的な教養部改革検討の二〇年の歴史があることに、改めて感を深くする。

なお、第二節全体において、ほかに名古屋大学史編集委員会編『名古屋大学五十年史 部局史一』『同部局史二』（一九八九年）も、もちろん参照させてもらった。

第三節の「文科系学部の改革」「理科系学部の改革」については、右の両議事録とも、概算要求の事項のほか事故、処分問題等以外は、性格上ほとんど触れられていないので困った。詳しく調べるには、一九七〇年代の各学部の教授会議事録を見せてもらわなければならず、大学史編集室は必要な部分については編集室から閲覧を依頼させてもらいます、ということであった。しかしやはり議事録全部を見なければ必要な部分もわからないこと、『部局史』自体が詳述されており、規定紙数からいえばむしろ相当圧縮しなければならないことから、各学部の教授会議事録を見ることは断念した。そこで、『部局史』を圧縮すること、「評議会議事録」「学部長会議事録」によつてとくに概算がらみの事項については補うこと、そのほか利用できるものを参照することを基本とした。そのほかのなかには、名大職組連合会が作成した資料集の一つである各学部長選考内規集、『名古屋大学理学部長及び評議員選考に関する資料』（一九七〇年四月）、教育学部史編集委員会編『名古屋大学教育学部史稿本』（一九八八年）等がある。なお、筆者が『同稿本』に分担執筆したとき、集めた資料も利用した。この時期に大学紛争を背景に、各学部で情熱をもって、学部長選考内規に職員・院生・学生参加の規定がもりこまれたが、最近の院生・学生の意向投票率の低さをみると隔世の感がある。また、文部省からの疑問提起を受けて、その後内規上から学生等の参加が削除されていくのを見ると、選考された理学部長の文部省発令拒否事件は大きな問題であったと思われる。

評議会の議事内容が大学史編集室で整理されていたので見やすかったが、それでも十年間分はかなりの分量であった。学部長会の議事内容は評議会の議事内容ほどの分量はなかったが、両議事内容全部を見るのに、夏の暑い時期に延三日かかった。この作業をするに当たって、編集室の方々にはいろいろ便宜を図ってもらい、お世話になった。また、同編集室の事務の方には、資料等のコピーでお世話になった。

(教育学部教授)

## 大学史編纂を振り返り、将来に期待する

元兼任編集室員 鈴木英一

### 一、名古屋大学五十年史の発端

『社史に見る太平洋戦争』（井上ひさし編、新潮社刊、一九九五年）という本がある。新聞社、出版社、銀行、大企業等々三十四の会社・団体・学校などの「〇〇年史」を編集して、戦中戦後の激動の歴史を綴ったものである。このように、さまざまな団体が自己の活動の歴史をまとめ、刊行しており、教育史の場面でも、地方教育史と並んで、学校史が無数に刊行され、当事者は勿論のこと、部外者にとっても、教育の営みを詳細に明らかにする貴重な資料となっている。

ところが、今回、『名古屋大学五十年史』が刊行されるまで、本学にはまとまった全学規模の通史はなかったし、学内にこの遅れを指摘する声も皆無であったので、私は、かねがねそれを不満とされていた。その私が、なんとか、